

豚の滲出性表皮炎（スス病）

第1回（2回シリーズ）

開業獣医師 山本輝次

はじめに

最近、養豚農家を訪問すると「スス病(滲出性表皮炎)が発生する原因と、何か良い治療方法はありますか」と、よく質問されます。また、滲出性表皮炎はPRRSに高度感染している農場で多発傾向にあり、PRRSの感染による哺乳豚や離乳子豚の免疫能力の低下が大きな原因と思われる。今回はこの滲出性表皮炎の原因や発生状況、症状、診断、予防対策および治療方法について、著者らが研究した一部を紹介したいと思います。豚の滲出性表皮炎は哺乳豚や離乳前後の子豚に発生する皮膚病であり、Staphylococcus hyicus(以下S.hyicus)が皮膚表面の損傷面から感染することによって起こる伝染性の疾患です。本病は発症すると、皮膚が脂性滲出物によって覆われた体表面に塵埃や糞などが付着し、煤を被ったように黒褐色になることから養豚家の間では俗に「スス病」と呼ばれています。本病は発見した時は、すでに症状が進行して重篤になっていることがあります。この疾病の特徴は、発症した豚の皮膚・被毛が脂性の滲出物に覆われ、表皮が脱落するなどの滲出性・壊死性の病変を起こすことです。そして、病勢が進行すると皮膚呼吸が困難となります。この結果、発症豚は著しい脱水症状を呈して、発育の停滞や衰弱が顕著になります。さらに、症状が進行すると敗血症となり、ほとんどの豚が死亡します。

1.原因

滲出性表皮炎が発症する原因は、哺乳豚や離乳子豚の皮膚にできる挫傷や擦過傷および咬傷などの損傷部にS.hyicusが感染することによって発症するのではないかと考えられます。

2.発生状況

本病の好発日齢は生後10～20日前後の哺乳豚で、全ての同腹豚に集団的に発症することがあります。また、散発的に2～3頭の哺乳豚に発症することもあります。本病の発生は哺乳豚同士の乳房の奪い合いから、口唇や鼻梁、耳翼周辺に咬傷が起きます。さらに、離乳後に腹の異なる子豚を群編成すると、腹違いの子豚同士が闘争するため、体表のいたるところに咬傷ができてしまいます。また、ブタヒゼンダニやブタニキビダニが寄生すると疥癬症となり痒みが激しくなります。さらに、飼料の急変によって生じる蕁麻疹や敷き藁、オガコなどによる皮膚への物理的刺激が原因で起こる痒みのために、豚は壁や鉄柵に激しく体を擦り付けます。この結果、体表に大小の擦過傷や挫傷ができてしまいます。そして、この咬傷や擦過傷および挫傷部位にS.hyicusが感染することによって発症するのではないかと考えられます。

3.症状

本病の発症初期は、突然眼瞼や口唇、鼻梁の周囲および耳翼に輪状で赤褐色を帯びた病巣ができます。この症状は、瞬く間に進行し粘稠性で脂性の滲出物が病巣部を覆うようになります。そして、進行すると顔面や耳翼、下腹部および股間部など皮膚の柔らかい部分に病巣が広がります。この滲出物に皮垢や塵埃および糞尿が付着して煤(スス)に塗れたようになります。さらに、末期になると全身の皮膚や被毛に粘稠性の脂性の滲出物が多量に膠着し、これらの滲出物に塵埃と食べこぼしたミルクや糞尿が付着し、乾燥すると黒褐色の痂皮を形成します。このため全身の皮膚は著しく肥厚し、触れると皮膚は硬く弾力性が失われ鎧を着た状態となります。甚急性の経過をたどるものでは、瞬く間に全身が滲出物に覆われ、元気・活力の消失と食欲は廃絶します。そして、極度の脱水や体力の消耗を来し衰弱死します。さらに、急性・慢性の経過をたどるものは滲出物の流出や症状の進行が緩慢で、発育が停滞してガリ豚やヒネ豚となります。しかし、多くの豚は食欲不振や脱水から衰弱して4～8日の経過で死亡します。

4. 診断

(1) 臨床学的診断法

本病の特徴として、好発日齢は生後10～20日齢の哺乳豚や離乳前後の子豚に多発する傾向にあります。さらに、発病初期に診断することが大切であり、発生初期は眼瞼や口唇、鼻梁および耳翼に特徴的な脂性滲出物の流出が認められます。しかし、一見すると哺乳時に口から溢れた水や母乳および人工乳に塵埃が付着したように見えるので、診断に際しては細心の観察が肝要です。そして、症状が進行すると下腹部や股間部に脂性の滲出物が認められ、患部に指で触れるとねっとりとした粘稠性に富んだ膠着物が指先に付着します。さらに、末期になると元気・活力は消失し、全身に脂性滲出物が流出して、膠着物に塵埃や糞尿が付着するために、黒褐色の甲羅を纏った状態になります。また、患部が乾燥すると痂皮を形成し皮膚の表面はカサカサになり、ところどころに亀裂が見られます。このため、全身の皮膚が著しく肥厚して弾力性を失い重度の脱水症状を呈します。一方、皮膚呼吸が困難となり衰弱死します。しかし、このような皮膚所見が認められる類似疾患として豚痘やパラケラトージス(角化不全症)、湿疹および疥癬症があるので類症鑑別が必要です。

(2) 病理学的診断法

剖検所見は全身の皮膚が肥厚し痂皮が認められ、下腹部や股間部に形成された痂皮は容易に剥離できます。強く剥離すると鮮紅色の湿り気を帯びた皮下組織が認められ容易に出血します。しかし、内臓所見では特徴的な病的変化は認められません。

(3) 細菌学的診断法

豚の滲出性表皮炎は外貌所見や好発日齢、発生状況および発生様式から容易に診断できます。しかし、確実に診断して的確な薬剤の選択をする方法として、本病に罹患した哺乳豚や離乳豚の患部をアルコール綿で消毒して、鋭匙で軽く剥離して採材します。また、斃死豚は剖検して肝臓や腎臓および各種リンパ節から採材して、S.hyicusの分離培養を試みることでです。

5. 予防対策

(1) 哺乳豚や離乳豚の闘争防止

本病が発生する大きな原因は、哺乳豚や離乳豚同士の闘争による口角周辺や耳翼および体表にできる咬傷にS.hyicusが感染することによって起こります。そこで、生まれたら出来るだけ早く切歯を行ってください。さらに、哺乳開始頭数の均一化や産子数の少ない母豚への里子に出す場合は、実子と里子の闘争も本病が発生する原因となります。そこで、闘争防止のための工夫、例えば豚は嗅覚が非常に発達しているので、鼻や体表に香水などをふりかけ、嗅覚を鈍らせて仲間と里子を分別できないようにするなどの試みも必要です。また、離乳後の群編成は最大で2腹程度にとどめるか、1腹単位の移動をすれば闘争が少なく、本病の発生防止の最善の方法となります。

(2) 飼育環境の改善

密飼いや換気不足および温度・湿度管理の失宜なども本病が発生する誘因となります。そこで、飼育密度と温度・湿度および換気など適正な環境コントロールが大切です。さらに、オガコや敷き藁は哺乳豚の脆弱な皮膚に微細な刺し傷や強い痒みを伴うため、壁に体表を擦りつけ挫傷ができるので、本病が発生する誘因となるので、使用に際しては注意が必要です。

(3) 外部寄生虫の駆除

ブタヒゼンダニやブタニキビダニは母豚を介して哺乳豚や離乳豚に寄生します。また、母豚の皮垢とともに豚舎内の壁や床に落下したダニは適度な湿度と温度があれば数週間生存し、哺乳豚や離乳豚に寄生して疥癬症となり強い痒みを伴います。さらに、ブタジラミの寄生は物理的的刺激のため強い痒みが起こります。この結果、哺乳豚や離乳豚は壁や鉄柵に体を強く擦り付けるために、特に皮膚が脆弱な哺乳豚の体表に微細な挫傷が生じます。この挫傷部位に、S.hyicusが二次感染すると滲出性表皮炎となります。これらの外部寄生虫の駆除も滲出性表皮炎の発生を未然に防止できます。

そこで、先ず妊娠母豚に分娩予定の1週間前にイベルメクチン(アイバメック)を投与して、徹底的にダニを駆除することが大切です。また、豚舎の床や壁に生息しているダニは有機リン系薬剤(エンダリン)を500倍に希釈し床や壁に噴霧して駆除してください。さらに、ブタジラミはクマホスやマラチオン、ナレドおよびトリクロルホンなどの有機リン殺虫剤やカーバメイト系の薬剤を散布して駆除してください。

(4) 発症豚の隔離治療

本病は正常豚が発症豚に接触することによって感染します。この結果、他の豚房にいる豚群に伝播することが考えられます。そこで、発症豚は早期発見・早期隔離して治療に努め、蔓延を防止してください。(次号に続く)